

車の運転能力向上 訓練システム開発

リハビリ後や高齢者に

平塚の企業



ラッキーソフトが開発したトレーニングシステムを使った模擬訓練の様子。移動する点に向かって、速く正確にハンドルを操作する。右下のパソコンで訓練項目と難易度を選ぶ＝2月13日、東京都内

病気や事故後に自動車の運転再開を目指す人や、運転に不安を感じ始めた高齢ドライバー向けに、平塚市の企業が「運転基礎能力トレーニングシステム」を開発し、東京都内で開かれた自立支援機器の展示交流会に出展した。3月下旬からリハビリテーション施設などに販売する。

この会社は「交通安全危険予測シミュレータ」など

映像技術を活用した疑似体験教材を手がける「ラッキーソフト」（同市宝町）。

同社によると、脳卒中や交通事故などで脳に損傷を負い、障害が残ったり身体機能が低下したりした人の中には、リハビリ後に自動車の運転再開を目指す人が多い。また、高齢ドライバーによる危険な運転が社会問題になり、運転能力の確認を希望する高齢者と家族

のニーズもあるとみる。そこで、同社は社会福祉法人・名古屋市総合リハビリテーション事業団の協力を得て、認知機能や判断力、操作力などを高める訓練システムを作った。

訓練は、ハンドル操作でポイントを動かし画面の中を移動する円を追尾する▽動くボールの色の変化に合わせてアクセルとブレーキを踏み替える▽信号や標識を認知して停止したり正しい方向に進んだりする――など9種類。それぞれ10段階の難易度を設定、合計90パターンの訓練が可能だ。

昨年秋季以降、同事業団の作業療法士らに試作品を使ってもらい意見を求めた。「もっと難しいレベル設定を」「音と視覚情報を同時に認知する訓練を」などの助言を受け改良を重ねた。訓練を行うと反応速度や

操作の正確さが数値化され、繰り返しすることで上達の程度や課題がわかる。リハビリ施設のスタッフはデータをもとに指導ができ、運転再開や継続を目指す人の能力向上が期待できるとい

う。2月12、13日には自立支援機器を作る事業所と、機器を使う側の施設関係者が交流するイベントに出展。

システムを試した東京都内のNPO法人関係者は「的確な反応が求められ、冷や汗が出た。運転再開に向けてモチベーションが上がるのでは」と感想を話した。

ラッキーソフトの三田村もな美社長は「一般的なりハビリと並行して、後遺障害が残った人が早い段階からこのトレーニングを始めれば、運転再開の可能性が高まる」とアピールしている。
(速藤雄二)